■シリーズ■

中学校武道

―授業の充実に向けて⑱⓪

―「今」の時代の武道授業を追い求めて―⑨

（ＩＣＴで再現性を高める柔道授業）

山口県長門市立深川中学校　教諭　山根　友樹

本校は私の母校であり、柔道に初めて出会い一生懸命に稽古に励んだ思い出深い学校です。今と昔の違いに戸惑いながらも、武道の心を授業や日常生活の中に取り入れながら落ち着いた生活をめざして過ごしています。今回私の浅い経験ではありますが、柔道授業で膝車とＩＣＴ（情報通信技術）について研究し実践したことを皆様へお伝えできればと思います。

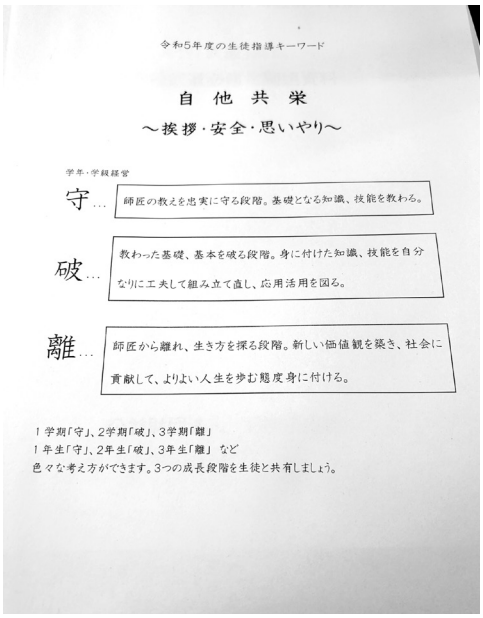
1　はじめに

私は平成22年に大学を卒業し、山口県内の高等学校で臨時的任用教諭として教員生活をスタートさせ、それから7年ほど同じ高等学校に勤めました。平成29年、中学校教諭に正式採用となり、当時の山口県で最も生徒数の多い中学校（全校生徒900名以上、各学年9クラス）に勤務しました。初任校では3年ほど勤務させていただき、その後、母校である深川中学校に転勤し、現在に至ります。

前述したように、現在の勤務校は母校であり、私が柔道に初めて出会った場所です。競技力を高める中で学んだことや高等学校での授業・部活指導で学んだことを、中学校の教育現場で如何（いか）に生かしていくかが私に課せられた使命であると考え、日々授業研究や生徒指導等に取り組んでいます。特に２０２０年に全国中学校（教科）柔道指導者研修会の講師を務めさせていただくようになってからは、授業をしていく上でどのよう

なことが大切なのか、また評価はどのようにするかなど今まで以上に真剣に考えるきっかけになりました。

校務分掌は生徒指導主任です。武道の心を生徒や教職員に知ってもらいたく、武道の心が伝わるようにさまざまなところに仕掛けを作っています。年度初めの資料には「守・破・離」の成長段階（**写真1**）を掲載し、本年度の生徒指導キーワードは「自他共栄～挨拶・安全・思いやり～」（**写真2**）としています。キーワードは校内の目立つ場所に掲示し、全校集会や行事後に振り返っています。


令和5年度の生徒指導キーワード

自 他 共 栄

～挨拶・安全・思いやり～

学年・学級経営

守… 師匠の教えを忠実に守る段階。基礎となる知識、技能を教わる。

破… 教わった基礎、基本を破る段階。身に付けた知識、技能を自分なりに工夫して組み立て直し、応用活用を図る。

離… 師匠から離れ、生き方を探る段階。新しい価値観を築き、社会に貢献して、よりよい人生を歩む態度身に付ける。

1学期「守」、2学期「破」、3学期「離」
1年生「守」、2年生「破」、3年生「離」など
色々な考え方ができます。3つの成長段階を生徒と共有しましょう。

写真1　「守・破・離」の成長段階を示した資料

写真2　本年度の生徒指導キーワードは「自他共栄～挨拶・安全・思いやり～」

2 技術の進化と苦悩

令和が始まり約5年が経過しました。この間、学校現場では新型コロナウイルス感染症対策の問題や1人1台端末によるＩＣＴを活用した授業など、目まぐるしい変化がありました。また、社会全般も変化しており、急速に発展したオンラインでの諸活動によりさまざまな価値観が生まれ、多様性のある生活が構築され、それが定着し始めています。

学校での特筆すべき大きな変化は、ＩＣＴを活用した授業ではないでしょうか。意見交換やレポートなどを作成するだけでなく、自らの課題を見つけ解決していく力を身に付けるためにはタブレット端末は大変便利なものです。また、活用方法によっては、生徒一人一人の学びをさらに深めることができる可能性があります。しかしながら、端末の不具合や不適切な使用のために諸問題が発生していることも明らかです。教員としては、日々開発、アップデートされていくアプリなどの扱いに戸惑い、それを使いこなすために時間を割かなければならない状況です。学習プリントの印刷が無くなるなど便利になる一方、獲得したＩＣＴ技術を発揮できないまま仕様が変わっていくことも多く、意欲を失うまではいきませんが、教材研究とのバランスを保つことの難しさを感じています。これからも、同じようなことが続いていくと思いますが、時代に取り残されないように踏ん張らなければならない時期であります。

3 ＩＣＴを使った授業の実践

柔道の単元においてタブレット端末は相性がよく、評価や振り返りなどで活用することができます。特に、一瞬で動作が終わってしまう投げ技では、「できた」「できていない」の感覚が自覚できず、自身の達成度が分からないままになってしまうことが多くあります。また、この状況ではできる楽しさや喜びを味わうことができず、「柔道＝面白くない」という

印象が強まってしまいます。武道には一瞬の美学という考え方もありますが、授業で武道を学ぶ場面においては、「どうしてそうなったのか」に重点を置き、再現性を高めてあげることが楽しさの発見につながると私は考えています。

タブレット端末のカメラで撮影を行い、再生しながら崩し、作り、掛けをじっくり観察することで、自分の評価ができたり、技を客観的に見ることができたりします。また、単元の初めと終わりの動画を比べると、上達の様子も確認でき振り返ることができます。柔道に限ったことではないかもしれませんが、武道という単元でのタブレット端末の活用は非常に有効なものであると感じています。

写真３　「膝車」を指導する筆者

写真３・４は第13回全国中学校（教科）柔道指導者研修会で私が担当させていただいた「膝車」の授業を学校で行っているところです（以下の**指導案**を参考にしてもらえればと思います）。初めて投げ技を行う上で、特に「理合い」に着目させながら授業を展開しました。「どうして人を投げることができるのか」を考え、そのためにはどのような崩し、作り、掛けが必要なのか、投げた後の安全を確保するにはどのような姿勢が適切なのかなど、生徒が考え、気づき、改善していく過程が膝車には多く含まれています。

写真４　筆者が「膝車」を説明する

さらに、次の時間ではタブレット端末で動画を撮影し、評価や学び合い、そして自分の技を改善するようにしました。生徒自身のイメージはさまざまで、実際に動画を見ながら確認すると、できていなかったり、思ったよりもかっこよくできていたり、さまざまな発見がありました。

▽以下は生徒の振り返りです。

・ポイントを意識して膝車をすることができました。自護体で踏ん張るところがなかなかできませんでした。

・次は左足を上手（うま）く当てられるように意識したいと思いました。そして、自護体の時にしっかりと足を踏ん張るようにしたいです。

・今日は膝車を動画で撮ってみて、柔道の選手みたいなかっこよさだったので少し感動しました。私はこれから気をつけることとして、土踏まずを膝に当てることができるように頑張りたいです。

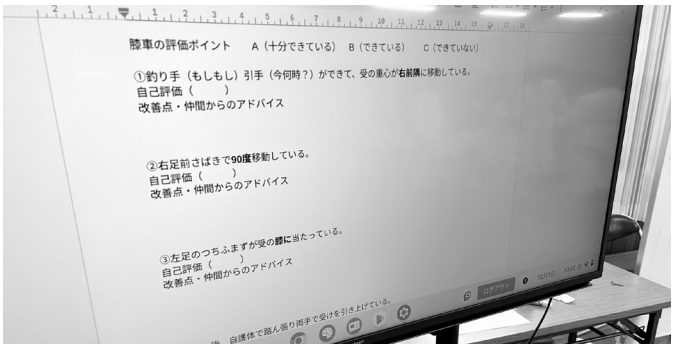
・今日は膝車の動画を撮って自分の技のかけ方を見直すことができました。動画を見てみることで自分のできていないところを知ることができました。自護体をもう少し頑張りたいです。これから、授業の中で自分の技のかけ方を見直しつつ上達していきたいと思います。

・もうちょっと両手で引き上げられたらよかったと思います。崩しができるようになるため、筋力トレーニングをしたいです。

振り返りから、次に意識したいことが明確に表れていると読み取れます。意識したいことが明確であればあるほど、次回への意欲も

指導案の概要 ○：留意点　　◆：評価

時間	留意点・評価等	予想される生徒の活動
崩し・作りの確認	・前に崩されたときに、どういう動作で対応するか考える。 ○４人１グループに分かれ、受・取・安全・観察の役割を与え、交代しながら実践と検証をさせる。気づいたことを学習プリントにまとめ、他者へ伝えさせる。 ◆評価：学びに向かう人間性 分担した役割を果たそうとする。礼法など相手を尊重した行動をしようとする。方法：観察	・取に引っ張られることで、どちらかの足が一歩前に出る（左右どちらでもよい）。 ・バランスを崩すと、修正しようとする反応があることに気づく。 ・上半身の動きと、下半身の動きが連動していることに気づく。 ・役割を果たそうとする。
崩し・掛けの確認	・出てくる足を右足に限定するにはどうしたらよいか考える ○釣り手と引き手はどちらの方向に引っ張れば小さな力で相手を崩し、右足を前に出させることができるか考えさせる。また、足を出しやすくするには右方向に引っ張るだけでなく、上方向の動きを入れることを指導する。 ○出てきた足を止めることで、相手を投げることができることを確認させる。 ◆評価：思考判断表現 釣り手と引き手をどのように動かすと、受の右足が前に出てくるか考え、工夫している。また、グループ内で伝えることができる。方法：学習プリント、観察	・釣り手、引き手を使いながら、右側に崩そうとする。 ・出てきた足を止めることで大きくバランスが崩れ、投げることができることに気づく。
	・技を掛ける ○４人グループ 取　：技をかける　　受　：自護体を評価 評価１：上半身の崩しを評価　評価２：下半身の捌きを評価 ○両膝➡蹲踞➡立位の順で行う ○取: 釣り手は電話（受話器を持つ動作）、引き手を時計（腕時計を見る動作）にし、右前捌きで受を右斜め前に崩す。左足裏を受の膝にあて、技をかける。投げた後は釣り手を離し、引き手に添え、自護体で静止し受に受身を取らせる。（受話器を持つ動作） ○受：右足が前に出るのをこらえ、取の左足裏が膝にあたったら前方向に受身をとる。右手は離さず、左手で受身を取る。 ◆評価：知識・技能 膝車の理合いを理解して技を施すことができる。 方法：スキルテスト	・上手く崩すことができる。 ・釣り手、引き手がうまく使えず、崩すことができない。 ・投げた後、自護体で静止することができない。 ・投げた後、釣り手を離し、引手と共に支えることができない。



膝車の評価ポイントをモニターで示す

タブレット端末による学習

左の生徒は動画で動作を確認。右の生徒は自己評価を行う

タブレット端末で技を撮影する

高まり、自身の上達具合を肌で感じることができます。

タブレット端末を利用する上で気をつけておきたいことは、「撮影する角度」と生徒が「何に重点を置いて観察するのか」を事前に明確にしておくことです。目当てによって観察するポイントが変わってくるとは思いますが、膝車の観察ポイントは基本的に、崩し、作り、掛け、自護体であると思います。その場面が確認できるように撮影者の位置を決めます。多方向から撮影できればさらに良いのですが、時間的に難しい場合もあります。今後、研究することでより精度の高い動画を撮影できるようにしていきたいです。

4 まとめ

一昔前は教員が手本を示し、真似をさせていくだけでなんとなく授業が成立していたと思います。そのように習ってきたという方も多いのではないでしょうか。武道の修練には、「見取稽古」があり、師範の行う動きの模範を自身で見て覚え、技を磨いていく修行方法があります。これは古くから受け継がれる伝統ある学習方法です。自分で模索しながら何度も繰り返し、身に付けていくことは武道の楽しさの一つであり、考えて実行し改善していくことは日常でも応用され、生活を豊かにすることができます。しかしながら、模範を真似して学び取る方法には、ある程度の技術レベルと時間が必要であり、さらに正確な見本を見せることができなければ実施が難しいです。タブレット端末を活用することで、古くからの見取稽古の良いところを残しつつ、今の生徒に合わせた学びを進めることができます。

今後も技術の進化により、学ぶ方法が変化し続けていくことと思います。獲得した技術が発揮できないまま、次へ次へと進んでいくかもしれません。そんな状況でも、変わらない武道の心を大切にして授業づくりを研究していきたいと思います。